新書紹介

変動する大都市

J・ゴットマン，R・ハーパー編

飛鳥田一雄ほか訳

鹿島出版会　A5版　228頁

1000円

都市スプロールの多面的分析

散歩に出かけてみたらいつもの林はなくなって，びっしりと家がならんでいた。私たちはそんな事態には少しも驚かなくなってしまっている。考えてみたら私たちは身も心も都市化の波に洗われてすっかり洗脳されてしまったらしい。他方，都市変動にたいする真剣な発言もある。ところがそうした発言は，都市集中への極端な嫌悪か，または現状是認，そうでなければ速効策の要求だったり，まこと性急な意見になりがちである。本書はそんな私たちの熱っぽい頭をさましてくれる。

本書は1964年南イリノイ大学で有名なジャン・ゴットマン教授を中心に行なわれた「都市スプロール会議」での論稿をまとめたもので，同教授のメガロポリス理論を発展させている。都市スプロールはいまや地球上における必然的傾向として多くの都市専門分野の関心を集めているが，本書はこの問題にかんする地理学会の最新の理論水準をしめすものということができるだろう。

戦後の都市スプロール拡大の背後には技術革新の成果がある。それにより通勤範囲，伝達範囲は広がり，工場と住居は分散し都市は拡大していった。それとともに大都市圏の中心機能はますます集中化を強めている。そのため交通難は激化し，生活環境は耐えがたいものとなっている。だが同じ技術革新は，スプロールの秩序ある抑制をする能力をもっている。ただ私たちは計画によって都市スプロールを変えることは，とりもなおさず自分たちの生活構造や様式あるいは思考を変えることになるということには気づいていないようである。前文にものべているように，本書の課題を都市スプロールの過程分析をすることにおいており，その欠点ばかりでなく大都市の利点にもふれ，現代の大都市変動をうきぼりにしている。

構成は，1部ではゴットマンが都市スプロールを概括し，2部ではメイヤー，トマス，ナッシュ，ヒグビーの4人がスプロールをもたらす力と形態にふれている。第3部では別の4人が都市中心部におけるスプロールの影響を住居，生産などの各方面から分析している。第4部ではゴットマンがスプロールへの方策として高層建築についてのべ最後にファーギンとマクニーが将来の都市計画と教育問題についてのべている。＜K＞

あとがき

都市化の進展や生活様式の変革は，社会福祉の分野にもつぎつぎと新らしい複雑な問題を提起しております。働く母親と子供の問題，老人の問題，重症心身障害者＜児＞の問題など，福祉行政は大きな転換期をむかえているといわれております。本市もこの数年間，市民ニードの実態をみきわめながら，こうした問題の解決のために力を注いできましたが，政治や社会のしくみもあって，市民の福祉水準はまだまだ十分とはいえません。昭和元禄とか，イザナギ景気とかいわれるなかで，社会福祉のそれぞれの分野でじみちな努力をされている方々のナマの体験をつうじた問題点の指摘と提案は，福祉行政の今後の進路を展望するにあたっての貴重な指針となるものと期待されます。ご多忙中ご執筆下さいましてありがとうございました。＜N＞

6-48-1

調査季報

20

1968年12月20日

編集・発行——横浜市企画調整室

横浜市中区港町1—1

印刷——有限会社　宮村印刷所

横浜市南区永楽町2—22